

傳承文藝に就て

國學院大學教授
折口信夫

一 傳承文藝の意味

私はこの題目に就て大意を申上げたいと思ひます。今度の講習會は話の上手ぶるだけを聞かせようと言ふだけでもない様です。話術の歴史についての知識をば幾分でも申上げることが出来れば幸だと思ひます。惡筆は一生の損といふことがあります。所謂、話べたは一生の損といふ意味での私は見本だと思って戴きたいと思ひます。

傳承文藝と申しますと、つたへうける文藝といふ字面であります。字義に拘泥してゆけば、どういふ文藝でも傳へ承けられないでは後に傳つて居ない。傳はらない以上は發達しないといふことになります。其の意味に於て如何なる文學も皆傳承文藝といふことが出来ますけれども、茲に特別に傳承文藝と申しましたのは、態々普通の文學を傳承文藝といふ必要はないのですから、その他の特殊のものをさう言つて居るのだといふことは考へるまでもなく明かです。つまりその特殊性をば引出して申せば、私の責任は済む譯です。詳しく述べれば、口頭——口先に傳承せられて來た文藝といふことです。従つて此の會の所謂話術の對象及び話術の歴史が、つた方面は、その大部分に當ります。さうして其ねがどうして發生しどうして展開して來たかといふ物語をすれば宜いのだと思ひます。茲に「文藝」といふ

ことを使つて居ることは、當然私の話に適當な用語例を持つて居ます。傳承せられる文學といふものは、結局、一つの藝能と、私等の側では申して居ますが、只今申す演藝といふものに、略々當ります。つまり純粹の文學でなく、文學及び其の他のものだといふ意味をば、文藝といふ語で現すことが出来れば非常に都合が好いのです。文學であり、さうして演藝的な分子が多い、昔の語で言ふと、藝能要素が澤山に含まれて居るといふ意味に於て、傳承文藝といふ名前は、非常に都合が好いと思ひます。私共は、以前はさういふ方面の文學的のものをば、非文學といふ名前を附けて居ます。つまり文學でないものならば態々文學と言はなくても宜いのだから、非文學と言ひながらも、文學と言つて居る以上は、そこに文學的要素がある譯です。非文學といふ名前で傳承文學を現して居たけれども、それでは分りにくくて非常に説明を加へねばならぬ譯です。それで傳承文藝及び口承文藝と申して居ますけれども、「しょう」といふ字に色々の書き方があつて、承知の承、暗誦の誦(口ずさむ)、或は唱歌の唱(となへる)の字も當嵌められ、色々あるけれども、區々に使つて居るやうです。先づ大體、承け傳へるといふ意味に於て、承といふ字に落ちつけた方が宜ささうに思ひます。そこで早速その傳承文藝といふことのお話を申さなければなりませぬ。

二 傳承文藝の主體

(一) 古代人の詞

古代の人の詞の中で、後世に残らなければならない詞と、即座に消えて差支ない詞と二通りあつたのです。日本は昔から言靈のさきはふ國と申して居ます。日本の古い文學或は文化を愛する人は、言靈のさきはふ國といふ語に非常に自信を持つて居ます。日本の詞は、靈妙不可思議な作用を持つて居て、短歌や其外の總ての文學は、そこに生れ傳承文藝に就て

て來て居ます。つまり美しい働きをする詞を持つて居る國だと解釋して居ますが、私共の考へでは、それは少し違ふと思ひます。常に使つて居る意味は、語の中に一種の魂——語のすびりつと、言語精靈といふもの——が潛んで居てその語を唱へると其の精靈が働き出す、斯う考へて居たのです。單なる名詞を口誦んだ所で、それは何にも働きがないが、昔から傳つて居ると考へられて居る一つの文章を唱へると、其の詞章の中に潛んで居る一種靈的な精神が、それを唱へかけられた人に働きかけるのです。或は人でなくとも自然の現象でも構ひませぬ。譬へば、風波が荒い時に、昔から傳はつて居る唱へごとを、風波の荒れて居る海、空に向つて唱へかけると、風波が靜まり、田に稻蟲がついて困るといふ場合に、昔から傳はつて居るとなへごとを唱へかけると、田の稻蟲をばあやつて居る目に見えない精靈にそれが働きかけて、どうしても稻蟲をば押へなければならぬことになる。その爲に稻蟲が出なくなつてしまふと、斯様に信じて居ます。つまり、言語精靈が不思議な作用を現すといふことが、言靈のさきはふといふ意味です。さういふ言語が古代の日本の國に傳つて居て、それを忘れてはいけないといふので、一生懸命に失はないやうに傳承して居たのです。そしてそれが日本の文學の始りとなつた譯です。まだしのゝめとも言へない時代のことです。とにかく文學が起る爲には、或一續きの思想を述べた語が、何といふことなしに傳へられて居なければ、卒然として文學が起る筈はないのです。まだひよつとすると、日本の學者或は學徒の中には、日本の文學といふものは、支那の文學が入つて來たことによつて、忽然として現れたのだと、思つて居られる人があるかも知れませぬが、支那の文學が入つて來た時に、それをその儘日本語に寫すといふ試みは出来ることではないので、豫め用意されて居て、大體それを受けることの出来る土臺がなければ、支那の文學がやつて來ても、それを日本の文學とは出來ない譯です。漢文其儘を受け繼ぐならば、割合に容易いことでせうが、漢文が入つて來たから、直ぐに日本の文學が起るといふことはありませぬ。

日本の國に文學の土臺になるものがあつて、そこへ支那の文學が後に入つて來て、其れを文學の型に嵌めたのだといふことでなければ、日本の文學といふものは考へられませぬ。

斯様に昔から、日本の國には尊い詞といふものが幾種類かあつて、それを無くすることは、神様に濟まないと考へ居たのです。それは吾々が考へて居るやうな神様ではなかつたかも知れませぬ。とにかく國々村々に不思議な神が現れて、斯ういふ詞を傳へたのだと稱するものが、幾種類かあつたのです。それが段々世の中が複雑になる程、數が殖えて参りますが、是も人間が殖やしたのではなく、神様が殖されたのだ、と考へて居た譯です。

昔の社會には、男と女、或は其村の若者以上の人と、それに對して女子供と二つの團體——階級と云つても宜しい——があつたのです。女子供に言ふことならず、とよく芝居で申しますが、その考へ方を日本人は昔から持つて居まして、女や子供には喫べれない男同士の約束があつて、神の祭りの時に唱へるとなへごとく云ふものは、子供や女には絶対に知らせなかつたのです。實際は聞いて居るかも知れぬが、覺えられないやうなむづかしい詞で、而も何故そんな詞が確實に傳へられて來たかと申しますと、昔は神様がお出ましになるには、必ず現實に姿を現されるものと信じてゐたのです。つまり祭りの時に、神聖な生活をした村の若い人、或は村の特別な神祕な力を持つて居る老人たちが祭りの時にだけ永い間の禁慾生活を経て、一杯の酒を呑むとすつかり人格を轉換してしまつて性質が變つた様に、神の資格を得たのです。是は近代の藝人社會にもこれに似た事があると思ひます。殊に、能樂だとか、芝居だとかさういふ種類の藝に關係ある人は、必ずさういふことを感じて居ると思ひます。おきな、三番舞を舞ふ時などは、禁慾生活を経てからでないと舞へませぬ。禁慾生活をしないでやつて、大變な問題を起したことが、一代か二代目の觀世家にありました。あの位不規則な生活に慣れて居る藝能家の間にも、神聖な藝を行ふ時には、まだ永い物忌みをし、家

族と別に食物を食べ、家族と一緒に話すこともあるが、勿論夫婦は別な所で寝なければならないといふやうな生活を、今も守つて居る方面がある譯です。それは何故だと申しますと、神格を得る爲です。つまり神様が出て来られると同じ效果を、藝術によつて現さうとするのです。其人たちがお酒を呑んだ瞬間に、是まで永い間物忌みを一生懸命繰返しくして居たのが、びつたり自分の身體についてしまつて、すつかり人格が轉換して、そこで祭りの場所に乗り込むといふと、自分が神になつてしまつた自覺を持つ譯です。是が昔の信仰社會の、神秘な生活の名残ですが、昔ならば無意味にこんなことをすれば、即座に血を吐いて死んでしまふと信じられてゐたのです。つまり祭りの度に、さうしたことを行つて居たのです。だから、村々・國々の神として唱へるとなへごといふものは、年寄から若い者、若い者から更に次の代の若い者と傳承されて行つたのです。斯ういふ風なことが、次第々々に時代を逐つて形を變へ意味を變へて参りますと、そこに分化作用が起つて参ります。そして次第々々に文學に近づいて來るのです。これが傳承の第一義です。さうして此精神がいつまでも付いて来て居るのである。うつかりすると、只今でもどうやら附いて居るやうに思はれます。其歴史を一通りお話するが、私の受け持ちだと斯う存じます。三時間の中にうまく纏りがつきますかどうか疑問ですが、聽き上手にお聽き下さるやうに願ひます。

(二) 叙 事 詩

儲てさういふ神々のとなへごといふものは、誰を相手に唱へられたかといふと、其村を圍んで居る同情のない目に見えないもの——村の周圍にあるものは皆其村に同情のないものなのです。現代人は惡魔といふことを知つて居ますが、昔の人は、勿論惡魔などいふ語は知らないし、又さういふ考もなかつたのです。悪くもなり良くもなるといふやうな、神より下のもの、即ち一種の「靈」とか「靈とか」、或はものといふやうな語で現して居る、精靈が村里家々の

周りを取囲んで居ると信じてゐたのです。——に唱へかけたのです。つまり、さういふものをば神が出て來て、となへごとを唱へかけることによつて、押へて行つて下さる。其詞は、元來神々の靈を說いたものなのです。或は又、その土地に居る所の「靈す」靈なぞといふ精靈の素性をば言ふことになつて居ます。貴様たちが幾ら跳梁跋扈しても、貴様たちの素性はちゃんと舉つて居るのだ。俺は斯ういふ貴い神だ、俺の言ふことを聞かなくちやならぬ、大體斯ういふやうな言ひ方になつて居ます。どんな悪い賊でも、皆素性を知られゝば參つてしまふのと同じ事です。さういふことを繰返して居ますうちに、つまり神の靈、土地の精靈、靈す靈の素性を明かすのですから、段々その内容が歴史的になつて來、歴史を物語ることに傾いて参ります。初めはとなへごと、即呪詞であるのが、段々歴史を語るものになつて参ります。即ち叙事詩といふものに近寄つて参ります。内容は歴史で、形は詩に近いものになります。詩といふものは心持ちの良い五、七、或は七、五、八、六など、色々の形をとつてゐますが、誰も發明しやうと思つて考へて出来るものではありませぬ。昔から段々考へて居たものが、あゝいふ形に落ちついて行つたのです。初めからさういふ計畫をして持へたものだと思ふ所に、總ての過去に對する學問の考へ方の、間違ひがある譯です。計畫なしに進んで來たものが、其間に選擇が行はれて、一番良い型に落ちつくことになるのでせう。つまり詩・歌といふものには人間の心持ちが現れて居り、是が極端になれば精神病になる譯です。一種の精神病に傾いて居る時に言ふ詞が、この律を持つて來るので、普通吾々の生活に於て言ふ詞は、調子が早くなり、音調が拗つて、音數に一つの決まりが出来て來て、内容は物語りであつて、外形は詩になるのです。即ち叙事詩といふものになる譯です。

何故呪詞が叙事詩になつて行くかといふと、それは人間の記憶力に限りがあるからです。人間の記憶力といふもの

はどこどこまで徹底したものではありません。つまり、是だけ記憶すれば宜いといふことも、もつと伸ばしてしまつたり、又必ず是だけ記憶しなければならぬと一生懸命思ひつめて居ると、其部分だけが特別に固定して、動きが取れなくなつてしまふのです。そして別に改める心持ちでなくとも、傳承して居る所のとなへことの形は自然に變つて來るのです。第一に變つて來るのには、斯ういふ原因があるのです。神様か唱へかけるといふと、土地のこ^ニ靈す^{スル}靈・すびりつとと稱するものは、答へなければならない。その答へる詞といふものが又出來て參ります。誰が答へるかといふと、是もやはり、人間が是等に假裝して、私は^{シテ}靈です、私は山の精靈です、私は海の精靈ですと言つて、それに答へなければ、誰も答へるものはありません。だから今度は、神の詞の外に、もう一つ精靈の詞といふものが出來て參ります。それが日本の文學を押し詰めて行つて最後に達するもの、事實から言へば最初ですが、逆に上つて行つて最後に達するものなのです。となへことの形は、非常に變化して居ますが、面影は残つて居ます。つまりのりとといふやうなもの、是が其最初のものゝ形の、可なり變化したもので、かうなつて參りますと、今度は神々の理會を求めなければならぬ、神々に懇へなければならぬ、神々に自分の衷情を披瀝して同情を乞はなければなりません。だから非常にくどくともものを申上げることになります。つまり是が叙事詩といふものゝ出來て来る元なのです。私は斯ういふ風にしてあなた様に昔からお仕へ申して居ます、と言ふ形式が段々宗教或は信仰上の衣を脱いで來ますと、君と臣下との關係に於てそれが繰返へされる譯です。宮廷に於て毎年初春に集る群臣に、天子様がのりとのもつと神聖なものを言ひ下されます。之を後の詞、奈良朝の詞で宣命と申します。それに對して群臣の代表者が出て壽詞といふものを奉ります。皆が出ると一日掛つても出來ませぬから、三人とか四人とか、大きな家の主人が出て申上げます。それは、私の主人が宮廷に仕へ始めまして以後、私の家では世々その職業を守つて宮廷に忠勤を勵んで居

ます。私もその通り致しますから、どうぞ天子様特別の御恩寵を垂れて戴きたうござります。斯ういふやうな、その家に代々傳つて居る壽詞といふものを、天子様に奏上申上げるのであります。そして其の詞は、段々と非常に長いものになつて來たのです。つまりその中には、其の家の歴史が入つて居たのですから、それを集めると、日本の大昔の歴史が出來る譯です。だから口の上で語り傳へて居るものが、先づ歴史になつて來るのであります。所が一方、内容よりも先づ外形が詩である爲に、次第々々に文學の領分に足を踏み込んで來て居る譯です。併しそれだけではまだ文學になりませぬ。文學になる第一歩は、皆の者がそれを聞くことを喜ばなければなりません。聞くことを喜ぶ爲には、聲樂的な要素を第一に備へなければなりません。そしてそこを通つて、今度はその文句の持つて居る内容を沁々と感じ、或はその文句自身の味ひに、皆惚れ入るとして來る、是が文學に入つて來る道程です。文學といふものは、誰も豫期して居ないけれども、昔からのとなへごとを聽いて居ると、ともかく心持ち好くなる聲樂的な要素があり、その詞々に味ひがあり、次には、其内容に、特殊な反省を促すといふと大袈裟でけれども、特殊な氣持ちを起させるものが出て來る。さうして次第々々に文學に向いて來るのであります。さうすると、以前から宮廷初め、貴族の家々、國々の豪族の家々では、歴史に目覺めて來て、俺の家の傳へでは斯ういふやうに傳つて居る、是が俺の家の歴史である。俺の家の統一して居る所の種々の團體といふものは、此歴史に依つて統べられて居るのだ、と斯う感じて來るのであります。だから何か儀式のある機會毎に、其となへごとから出た一つの叙事詩を唱へて聞かせるやうになつて來る。更に其れを唱へ聞かせる職業が出て參ります。それを語部^{かたり}と申します。語部といふことは、語を傳ふる所の職業團體といふことであります。

(三) かたるといふ語

かたるといふ語ですが、是は日本の藝能・演藝の歴史で、一番大事なことで、歴史的のてくにつくは未だに多く使

つて居ますが、その中で一番大事なことは、うたふとこのかたるといふことで、その外に今一つ、となふといふことがあります。となふといふことはしたがへるといふことです。御承知の通り、殉死の殉といふ字は、じたがふといふことです。普通、人の歩く時に跟いて來るとさは、殉といふ字を書いて、之を古い訓では、となふと讀んで居ます。だから素讀の時には、何々を、となふといふ読み方をして、約束をする時には何々をしたがへると言つて居ます。となへごとを唱へるといふことは、となへごとに依つて人をしたがへる。或は精靈をしたがへるといふことです。所が語りもの、即物語が叙事詩になつて参りますと、今度は是は、となふとは言はないで、かたると言ひます。つまり叙事的な内容を持つた物語は、節廻しの緩いもので、歌つては行くけれども、かたるといひます。今でも義太夫をかたるといふのはそれです。常盤津、清元などは、かたるか、うたふか、内容は淨瑠璃だけれども、うたふ方から言へばうたふらしくも思はれます。が、清元などは、かたるといふのがよいやうです。所が長唄をうたふ。小唄をうたふ、歌澤をうたふなど、言ひます如く、うたふといふ方は、節廻しが早いでせう。つまりむづかしく言へば、叙情的なものを唄ふ時にはうたふと言ひ、叙事的なものを唄ふ時には、かたる、と斯う言つて居ます。併しながら、是は昔からある區別で、大昔何時頃起つたと云へない程古い昔からある區別です。うたふといふことは、うつたへるといふことと同じです。どうぞ私の言ふことをお聽き下さいまして、くどくと自分の心持を哀訴する。即ち今の語では、うつたへると言ひます。裁判所に訴へるといふのもその意味の變つて來たものです。それともう一つ、叙事詩をとなへるつまり、かたるといふことも、略々意味は譯ります。となへごとの持つて居る内容に相手を同感させるといふことです。時代がすつと流れますが、平安朝の末、鎌倉の初めあたりには、さういふ使ひ方がはつきり出て参ります。親鸞上人の遺文を見ますと、自分が法然にかたはれまつたといふやうに書いてあります。つまり、法然上人に騙されて、私は淨土

信仰に入ったのだけれども、是が却つて幸福だ、世間からは、騙されたと思つて居るかも知れぬが、幸福だと思ふと、斯ういふことです。だから宗教熱の盛な時は、さういふことの、感激を持たない人々が見ると、騙されたと言ひますが、そこへ入つて居る人は騙されたとは思つて居ない譯です。かたらふといふことは、だますといふことにも使つて居るが、後になると人を騙して物を取上げることまで騙りと言ひます。無賴漢がたりするなど、斯ういふ風に、段々變化して行くのです。だから語るといふことは、話をするといふことが元の意味ではなくて、相手の魂をこちらに被させる感心させるといふことなのです。それが次第に分化して來たのです。うたふ・かたるは、一つはうつたへる、一つは相手をば詞で征服をするといふことですから、相對的になつて居るのです。

斯様にして、日本の文學といふものは、段々文學にならなければならぬやうに進んで參りました。併しそれは文字の形を取らないで進んで來たのです。歴史の上から見ますと日本も早くから支那の學問が入つて居ます。が、それは中央のこと、又、支那大陸や朝鮮半島に近い地方には、もつと早くから支那の學問が入つて居ます。が、それは中央のことで、文字が入つた所で、それで直に、今まで口で傳へられて居たもの、語られて居たもの唱へられて居たものを書き寫すといふことはしないのです。何故かといふと、書き寫すといふと、誰でも見ることが出来るです。つまり書かれるといふことは、神祕性を失ふといふことです。だから、書かないで其の儘口傳へして居た譯です。この方法がずっと續いて、神祕だとは思はなくなつた後世にまでもずつと續いて居たのです。書いたのでは駄目だ、口で傳へなければ駄目だ、斯う思つて近代まで傳へて居る譯です。けれども、口ばかりでは頼りないから、こつそり書いて置くといふやうな考へで、一方何でも彼でもこつそり書いて居たのです。一番最初はそれを露骨に書き寫し出したのが、淨瑠璃でせう。義太夫淨瑠璃の奥附けを見ると、大抵誰々寫本と書いてあるのは、つまり誰々がうたつた本の是が疑ひのない

臺本だと、いふことを示して居るのです。さうしてそこに誓ひのやうな詞があつて、「祕事はまつ毛」などいふことが書いてあります。人間の神祕のかくしことといふものは、まづ毛と同じことだ、目の前にあることだけれども譯らなければ、當然口で語られなければならなかつたのです。江戸時代は、淨瑠璃説經——説經のきょうは經文の經です。祭文・念佛、即語られ歌はれて居たそれが、皆標本を持たないのが本當たつたが、それがばつゝー臺本を持つて來た。勿論義太夫淨瑠璃より前に、色々の標本はあるけれども、それは内密にやつて居たやうです。宗教的な色合ひがまだ感ぜられて居る文學は、書かれないと語られることが大體原則だと思つて居た。さういふ精神がすつと後まで續いて居ます。況して、幾ら文字が入つた所で、それは問題ではなかつたのだが、段々世の中が變つて來て、となへごとその大外に對する信仰が變化して來ると、今度は書いてもさし支へがなくなつて來たのです。そして、出来るだけ書くけれども、出来るだけ古い語を失はないやうに、といふ試みを致します。古事記或は日本紀などに古い語の入つて居るのはこの理由です。殊に古事記には、古い語、古い文章などが、其儘そつくり入つて居て、読み違ひをしないやうに、間違つて發音しないやうに、あくせんとの印しの附いて居る部分もある位です。間違つて發音したり、間違つた讀み方をすると、神の罰を受けると、斯う信じて居たのです。

(四) 日本文學の目醒め

斯様にして、となへごとから叙事詩が出て來ます。叙事詩が出てくれば、もう日本に文學が出て來たことになる譯です。是が今日の傳承文藝の主體となつて居る一番根本のことさせう。その叙事詩の話だけをすれば、私の役目は済む譯です。外にも傳承文學は澤山あつて、叙事詩に對して抒情詩がその非常に大きい部分を爲して居ますが、是は此

度は觸れませぬ。つまり、話術に關する傳承文藝ですから、叙事詩の方面ばかりを主として申上げたいと思ひます。叙事詩が段々進んで行くうちに、日本の國は外から段々文明を吸收して進んで參りました。世の中に段々餘裕が生じて來て、一番最後のもの、即文學をば取入れるといふことになつて來ます。初めは實生活に必要なものを取入れてゐて、そこにゆとりが出て來ると文學、つまり支那の紳士たちが弄んだ所のものを取り入れやうとしたのです。既に奈良朝以前から、支那の文學に精進した人が出て居たと思はれます。段々支那の文學と似たものを題材に見出して、それを支那風に書いて行く、當時奈良朝時代にかけては、所謂晉唐の文學が盛な時代ですから、それが日本に取込まれて來た。つまり民間の小說と言へば、支那の意味では、民間說教、即民間の傳説といふことに過ぎないのです。つまり、民間で想像して居る宮廷の生活、貴族の生活は、斯ういふものだ。或はもつと貴いお方たちが、吾々の行けないやうな仙人の居る世界に行つて遊ばされた話、かうしたことを探考へて居るのです。それが、更に進んで、吾々の中で特殊な者が、偶然仙人の世界に遊んで幸福を得た、といふやうなことばかりを題材にして、支那の小說は榮えたのです。所が日本にも古くから、かうしたことがうよくとあつたので、それが皆、奈良朝以前から支那風に翻譯されて漢文で書かれましたが、それには漢文で書けない部分が一ヶ所あるのです。つまり其中に入つて居る歌です。歌は漢文で、翻譯しきれないものだから、大抵は萬葉假名で書いたのです。所が段々變化して來ると、漢文で書いてゐた部分をも長歌の形で書く様になつて來たのです。即、日本の民間傳説をば、長い歌の形で書いて行つて、歌をその後へくつつけるといふやうな試みが出來て來た譯です。いろいろさういふことをして、文學に自覺めて參ります。

三 傳承文藝の保持

所が更に、こゝに今一つの事があります。先に申しましたやうに、神になつた人が土地のご靈す靈などいふお化けのやうなすびりつとを、押へに来る、その習慣が役々進んで來ると、今度は逆に、或年の變る時分とか、季節の變る時分になると、土地の精靈が列を作つて、其地方の力のある家、威力を持つた人の住んで居る家を祝ひに来る。年の暮れとか、節分の晩、又はお正月の晩などに、何とも彼とも形容出來ないお化けのやうなものが現れて來て、寺なら寺、宮なら宮、貴族の家なら家を祝福して廻る、これは今では大分無くなりましたけれども、古い格式を持ち續けて居る寺や社にはまだあります。譬へば、名高い京都の太秦の廣隆寺の牛祭といふやうなものは、さうであります。

まだら神といふ名前が與へられて居ますが、元は何でもないその土地の神様が、その日になると現れて来て、其寺をば祝福に來たのです。さういふ習慣は、昔程激しくて、奈良あたりでは、町の周圍にある所の澤山の村から、春日の社或は興福寺を祝幅して廻つたものが、更に南都七大寺に行き、終ひには京都の貴族の家を廻り、或は武家の權力ある家々までをも廻る様になつて來ます。是に能樂の盛に起つて來た室町時代の材料を見ますと、非常に澤山あることです。正月中は、殆ど毎日そんなものが出来て居ります。それが、段々人間のして居るといふことをはつきり意識して來るのですけれども、其中には、人間が化物か譯らない風をして來るのも澤山あります。初めは皆化物みたやうな格好で出て來たのが、段々人間の姿で出て來る様になつたのです。京都の太秦の牛祭などは今でも本道のお化けの形で行つてゐます。これは、つまり土地の精靈が出て來て祝福して廻る形です。是が日本の傳承文學と非常に關係深いことであつて、藝能、演藝といふものは、斯ういふことをする人たちの手で育てられた部分が、非常に多いのであります。

明治以前は藝能を行ふ人々は、大抵卑められて居て、特別に幕府から保護を受けて居た能樂だとかいふものは、別

たが、その他ものは大抵卑められて河原乞食など言はれてゐます。河原乞食といつても、役者ばかりでなく、その外の藝人でも皆さういはれたので是は河原に住んでる乞食といふことではないです。御承知の通り此の頃問題になつて居る山窩といふ、河原で小屋かけをして、そこで生活をして、或る時期が來ると他所へ移るものがありますが、それを河原乞食といつて居ます。地方に依ると呼び名は違ひますが、ともかくも、藝能を行ふものは、乞食と見られて居たのですが、その時代の日本人には、本道は吾々の考へるやうな乞食といふ考はなかつたかも知れませぬ。奈良朝時代に、僧行基の信者、即ち行基門徒が、諸國をこつじきして歩いたことがあつて、是は特にお上から許されたのですが、宗教の信仰の爲に苦行して、一番卑しいことに耐えて歩く、自分達は一番遊食の民だから、他人の食ひ餘しを貰つて生きて居るのだ、といふことをば看板にして歩いたので、さういふことを許されて居たのです。吾々の考へて居る乞食といふものは、この行基門徒の生活から出たらしいのです。日本では、乞食と書いて、ほがひびとと言つて居ますが、是は奈良朝以前からさう言つて居たに違ひないのです。つまり昔は、皆、土地を持つて生産の基礎として居るので、土地を離れて生活して居る者は、非常に卑められたのですが、其中で、諸國を廻り、長い間一種の宗教の宣傳をして歩いた人たちがあつたのです。それが大體、平安朝の末頃になると、肯定住してしまつて、その一番の落伍者が只今の所謂山窩といふものになつたらしいのです。日本の國民の中の大部分は、戸籍につかないで、無籍者として諸國を流浪し、自分等が昔から持つて居る神々の信仰を宣傳して歩いた。それをほがひびとと言ひました。ほがひぶといふことは祝福するといふことです。縁起を祝ふといふことです。つまり、目出度い文句を唱へて縁起を祝ひに来る人をほがひびと言ひます。又、之をほがびとともに言ひ、それが詰つてほがととなり、更に詰りましたのがほいとでせう。ほいといふのは階堂のこととて、堂の側にくつついて居るから、斯ういふ字を書いたのでせうが、後

には暗堂をほいとうといふやうに發音することになつて居るが、それは信じられませぬ。土地に依つて生業の基を開かず、歩いてとなへごとをすることに依つて糊口して居た、さういふ人が澤山あつたので、此はがひびとが段々變つて來たものが、只今でも行はれて居る萬歳の元の形です。是は平安朝の盛な時分には、千秋萬歳といつて、家々の主人が萬世に榮えるやうに祝ふて廻つた、千壽萬歲とも言ふものです。この萬歳といふ職業は、傳統的に傳つて居ます。勿論さうした民間の藝であるから、正しく傳統を追はないにしても、色々と新しい時代に應じた趣向を含んで行くものは、後まで残つて行き、それの出來ないものは、亡びてしまふた譯です。つまり頑固な藝は、亡びてしまひ、何でも融通無限に取込むことの出来るものが、進んで行くのです。今日の萬歳は形が變つて居る様ですが、御覽になつて居る方はお譯りになりませう。お正月に出て来る萬歳にしても、淺草とか千日前とか、京極とかでやつて居る萬歳は非常に變つて居て、譬へば、野球萬歳とか、インテリ萬歳とか色々のものを複合したものになつてしまつて居ます。この萬歳系統の藝をする者を昔からほがひびと言ひ、この藝をば、ことほぎと申します。

ことほぎといふことには、となへごと以外に踊つたりすることも含まれてゐるので、ことほぎの人たちが、單に祝ふことばかりでなく、色々昔から傳つて居る、過去の歴史の断片をば、自分のうたひものに取り込んで來るのです。つまり、その家を訪問して、自分たちに傳へられた物語を語つて行く、だから無茶苦茶な、文學にもならない以前のものを、澤山にぶちまけて、始中終、後から後からと、さういふものを撒き散らして行くのです。實は此ことほぎのほがひびとばかりでなく、もつと古くから、日本には、さういふ人等があつたのですけれども、とにかく、日本の戸籍につかないで、日本民族でありながら、無籍者として諸國を流浪して居た民が澤山あつたのですが、それぐら皆相當の組織をもつて歩いて居たのです。それが皆各その仲間々々に傳はつてゐる昔からの歴史といふものを、語り傳へて居た。

だから、日本の國家の基礎が固くなる以前に、既に歴史だと信ぜられて居た色々の物語が、日本中に散らばつた譯です。

たとへば、天田振アタツブと言ふ大歌一宮廷詩一に關聯した物語、近親結婚を行つて、追はれた昔びとの上を語つた歌語りがあります。古事記・日本記の「天田振」に關する條を御覽下さい。別れくになつて後、戀しさに堪へ兼ねて、その話ではないのです。一體話などといふものは、よく聞かなければいけないので、何でも譯も譯らないで、彼此と言ふのは、悪いことです。此物語も本道に考へると、その説明はつくのです。つまり、貴種流離物語と申して、貴くて若い方が、何處ともなく行かれて、その土地に止まられたのを、土地の人が非常に大事にしてお育て申すといふと、神の生活の御資格が完全にお出來になつて、天に歸つてしまはれる、といふ話が澤山あるのを、或歴史上の名高い人捉はれてはいけないので、そんなことをやかましく言へば、優雅な物語は無くなつてしまひ、國民的情操の源泉になつてゐる事すらも、なくなつてしまひます。されば文學もなく、歴史もない國と一つになる譯です。もつと根本的に考へるといふと、歴史家たる事の爲に昔の考へ方を出来るだけ藝術化して考へないことになるのです。又斯ういふ話も出て來ます。萬葉集などに出て居ますのに、貴い御方が何を爲さつたのか譯らないが、三河の國に流されて、憐れな生活をして居られた。土地の人が、氣の毒に思つて、あの御方は尊いお人でありながら、海に流されて、海岸の物を取つて食べていらつしやるといふ意味の歌を作つた所が、その御方は、命が大事だから海の物を取つて生きて居るのだ、と仰しやつたといふやうな歌も出て來ます。斯ういふ話を皆先程申したやうな國體の人が持つて歩いたので

す。その中に海部の民といふのがあります。かうした話は皆、あまが語つた話です。さうして、それをほがひびとが持つて廻ります。さう考へると、物の憐れを知らない澤山の者が、日本の國の昔に残る所の物の憐れを知つて、立派な民族になつて來たのだといふことの説明がついて來ます。斯うした人々が藝術の芽生へ、文學の芽生へを蒔き散らして歩いたのであつて、物の憐れを知らぬ人々がその話を聞いて、涙ぐみ、或は泣くといふやうなことの、味ひを知つて來るのであります。

さうするとそれが、今度は文學になつて來ませう。譬へば、奈良朝時代に、石上乙曆といふ大貴族が、土佐の國に流されたことがあります、その時の歌も、やはり是はほがひびとが歌つたのです。

平安朝になりまして、小野篁が隱岐の關に流され、又光源氏が須磨と明石の間で暫く苦んで暮したといふやうに、海岸の生活をして、あまと同じやうな暮しをして居た人々があつたのです。これを逆に見ると、海部の民がほがひをして歩いた物語が、段々育つて來て、吾々の國の昔に、さういふ團體が幾十となく國々を歩いて居たことが考へられます。今は、あとの話だけをしたのですが、その外にもあります。之を近世までずつと關係づけて考へますと、近世に於ても、不思議なことがあります。

職人たちが澤山何處からともなく固まつて行きます。鍛冶屋がやつて来る。或は屋根屋がやつて来るといふやうに、時を決めて集まつて來ます。さういふ人たちは何か藝を持つて居るのですが、併し本業の方が忙しいので、藝の方は人が考へなくなつて、藝は餘興みたやうになつて、珍しいと思ふ位に感じられる様になります。所が段々藝を専らにする者が、其中から出て來るのであります。この旅をしながら藝をして歩くことは、食詰めて諸國を歩くといふのではなくて、さういふ生活の様式が昔からあつたので、是は國家の基礎が定まるか定らない時代から、續いて居る

形であります。さうして斯ういふ生活をして居る人たちが、主として傳承せられる文藝をば、保持して持ち應へて居つたのであります。

それに就きまして、少しく細かくお話申上げたいと思ひます。

四 傳承文藝の變遷

一 謳と歌

講釋師は、近頃は講談師と申し、落語は本道は落しばなしですけれども近頃では落語家と申します。この講談、落語等に就ての説明をして、出来ますれば外のものにも觸れて行きたいと思ひます。

唱へ言をして居るけれども、それが、長過ぎ、或は又、唱へ言から出た敍事詩或は物語といふものでも、長過ぎるゝ唱へ言の中に、急所が出来、その急所だけ唱へれば、それでよいといふものですが、この中臣大祓の祝詞は、非常に長いので、その全體を唱へることもあり、一部分を唱へることもあり、の急所といふものがあつて、その急所だけを唱へると、全體を唱へると同じ效果をもつて居ると考へられてゐたのです。それだから、當然様式がだん／＼變化して來るのである。譬へば、長歌があると、その一部分の短歌だけを取り出しても、それをうたふのです。又、長い唱へ言があると、その一部分の、神様が傳へたといつたやうな部分だけを唱へるのである。これが謳の起原なのです。謳といふことは、言換へれば言價は傳承文藝に就て、

して、それには、かういふことをしなければならぬ、かういふことをしてはならぬといふ二種があります。それからもう一つ、何の譯だか分らないけれども、傳へなければならぬと感する詞、とかう三種類があるやうです。さういふ分類の仕方はないが、とにかく文字或は詞で、しなければならぬ、してはいけない。——日本では、してはいけないといふことが多いやうですが、これは信仰的にかういふ戒律を犯してはいけないといふのですから、珍しくはないのでせう。——それからもう一つは、この事を失つてはならない、といふ信仰の下に保持して居るもの、とこの三種類がある譯です。而してその歌なり諺なりの、背景として根本に背負つて居るものがあるのです。何故なれば、その唱へ言なり、長い歌なりといふものを、背景に背負つて居るから、この短い文句に力があると、かう考へられて居たのです。それで、その歌或は言慣はしを言つて、神事を行ふのですが、それが相當長い間經りますと、歌ばかりが面白くなり又諺だけが力を得てさうしてその背景のものを忘れてしまふのです。つまり、かういふことを祈る時には、この言慣はしを唱へると、かういふ效果が實現するといふ風に、それに慣れてしまふと、後に背負つて居る背景をすっかり忘れてしまふのです。又、この歌が大事だといふと、その歌ばかりをやつて、その歌の本になるものを忘れてしまふのです。ところが、段々元の文句を表はすえつせんすの様な歌・諺も、詞の偉力を發揮することが出来なくなり皆行き詰つてしまひます。既に古い昔に於て行き詰つて居るのです。そして、これが先づ大體落し嘶の初めを開く譯です。

(二) 落 し 嘶

それで、この落し嘶の例を一つ申しても、先から今の形を考へて人が作つたものでないことが譯ります。そして、總てのものが、今の形を豫期して、それを基礎として考へたら、何にも考へられなかつたらうといふことが、御譯りになると思ひます。それは餘り古い物を引かなくとも譯ります。譬へば、皆さん御存じの、平安朝に出來たといふ

竹取物語、あの書物は歌と謡で一つの話の段切れになつて、話の段切れに謡か歌か、何かがついて居なければ、納りが悪いといった格好です。竹取物語の一番終ひは、かぐや姫が非常に美しいので、澤山の人が結婚を求めて來たが、誰も彼も受け付けない。最後に五人の貴族が残つた。その五人の貴族も皆失敗した。その後に、天子様が鷹狩りにいらして偶然かぐや姫の家にお出になつた。さうしてかぐや姫を宮中に召し入れようと思われた、といふ話で一段の話が了ひます。ところがかぐや姫は宮中に入るることも御承諾申上げないで、遂に八月十五夜の月の照つて居る晩に空から迎ひが來て、天に昇つてしまふ。私は天で犯した罪がありますので、その罪の償ひに、この土地へ來て居りました。今その時も満ちたから、天に歸ります、といふことで歸つてしまふ。そのところは、竹取物語の一番小説的なところで、日本の小説の中でも、最も小説的なところですが、天から迎ひに來て天の羽衣を着せやうとすると、ちょっと待つて下さい、これを着ると人間界の感情を失つてしまふから、その前に申して行きたいことがあるといつて、天子様にお上げしてくれ、といふことで、不老不死の泉を盛つた壺を残して昇天してしまふのです。ところが未だに煙となつて立ち昇つて居るのだ、といふのです。日本國中でどの山が一番天に近いか、駿河の國の富士山が一番天に近い、そこで「つきのいはがさ」といふものを御遣りになつて、それを富士山の上で火で焼いて了はれた。それがまた煙となつて立ち昇つて居るのだ、といふのです。竹取物語が出來たのは、何時か譯りませぬ。大分議論があり度火が噴いて居る時だから、その話が出來たのでせう。竹取物語が済んだ時には、火も消えて了つたかも知れませぬが、つまりこれは、不死の泉を焼いてしまつたところから富士山だ、ふしの山だといふ洒落であるかも知れませぬ。そこは餘り面白いところではなく、苦り切つて洒落を云つて居るところなので、面白いところは、五人の貴族が、

かぐや姫を手に入れようとする段です。それに對してかぐや姫が皆難題を持掛け、これくの物を持つて來て下さい、さうしたらあなたの妻になりませう。中には正直にそれを手に入れようとした者もあり、中には横着な考を起して、偽物を揃ませようとした者もあるのです。ある人は、貴方は燕の子安貝といふものを手に入れて來い、と云はれた。無い物に極つて居るのですが、そこでその貴族は、始中終自分の家へ燕の來るのを見て居ますと、何時もの所に巣を掛けた。それで荒目の籠を、緒のやうな繩で引つ張り上げて、燕が卵を産む時に手を差し込んで、ひよいと見ると、燕の古糞を握つて居つた。が子安貝はない。これから「おほふにたがふことをばかひなしとはいひける」と書いてある。又ある人には天竺の御釋迦様が持つて居られた佛の御鉢を持つて來てくれ、といふのですが、そんな物は日本中搜したところで駄目で、どうしても手に入れることは出來なからうと、天竺に行くふりをして竊かに歸つて、大和國十市郡のある山寺のびんづるさんの前にある鐵鉢が眞つ黒にくすぶつて居たので、譯るまいと思つて、それをかぐや姫に、これは佛の御鉢だといつて差し出しがたが、かぐや姫は神通力をもつて居ますから、直ぐ偽物だといふ、で返してしまつた。でその時分の調で、今なら恥を搔くといふことを「はぢをすつ」とかういふ風に云つた。「おもなきことをば、はぢをすつとはいひける」と書いてゐる。つまり面白い、不名譽なことをば、今なら恥を搔くといふことを、昔は恥をすつといふ風に云つた。これは語呂合せの洒落ですけれども、ともかくさつぱり話になつて居ます。これは當然で、世間の人があつて居る筈の、古くからの言慣はしを利用して、その言慣はしの起りは茲だ、と説明して居るのです。だがそれには本當のことを云つては何も面白くないので、だからかうだといふことも、實はそれは嘘の技術で、なる程旨く云つて居るな、といふ感じを與へなければならぬので、餘り旨く云つてしまつて、さうだと

信じさせては洒落にも何にもならない譯です。その技巧がむづかしいのです。

併しながら、それと共にもう一つ變つた方法に、つまりある詞があつて、その詞はがういふ背景から生じたのだ、といふ説明が昔行はれて居たので、それを逆用して、話の縮りを下げる爲に、諺をもつて來ることもあつたのです。つまり諺の説明の爲に物語があつたのを、逆用して居るのです。もつと眞面目な例を取つて見れば、これはわかれます。

古事記には「ところえぬ玉作り」と言ふことがある。其諺の起原として垂仁天皇の狹保彦征伐の物語が説かれて居ます。

天子様の軍勢が攻めて來られたので、狹保彦の妹君は砦の中へかくれてしまはれた。天子様も此妹君だけは救ひたと思はれました。たばかつて稱の砦からお引き出し申せと言ひ付けられた。そんなことは此貴女の方ではちゃんと諺つておいでになつて、欺されなさらない。それで砦の下に行つて御子をば俺の手に渡せと申されます。これが後になつて、長い神秘な話のあるお方です。其御方も御子と一緒に伴ふのをお厭ひなされて、何卒子供は持つて行つて下さい、といつて差出された爲に、その折に力人が女君のお手を引つ張つた。すると昔は玉の緒を付けて居ますが、その玉の緒がぶつぶつと切れてしまつた。それは玉作りに命じて、どんな技巧か知りませぬが、緒を腐らして置かれた爲に、引つ張ると直ぐ切れてしまつたから、此方を助けることが出来なくなつて、砦も破れて、女君も其兄も亡つてしまつたのです。そこで天子様が大變殘念に思はれて、あれは玉作りが悪い、玉作りがあんな緒を捲えたから、貴い女書いてある。さうだから、これは必、地所得ぬ玉作りといふ詞が、可なり古い人々の知つて居た知識でなければなら傳承文藝に就て

ない。さうでなければ何にも效果がない譯です。ともかくもその詞の起原を説明してある話です。この詞はこの物語の中から始めて出て行つたのだといふ話です。

思ふに、恐らく「地所得ぬ玉作り」といふことは、玉作りといふものは土地を持たなかつたのでせう。玉作りといふものは、玉を土地から出すのですから、土地を得なればならない筈ですが、土地を持たなかつたのでせう。當時は職人の中、土地のある職人と土地のない職人とあつたのです。後世では、生業の本を土地から出さない者を、職人と謂つて居ます。地所得ぬ玉作りといふのは、土地を持つて居ない玉作りといふことで、玉作りが土地を持つて居ないからかう云つた詞でせう。玉作りでないけれども、所を得ない、といふ洒落です。つまり、所得ぬといふのは、適當でない、不適當だといふ意味で、あれは適當でない、といふ洒落見たいなものなのでせう。譬へば、入谷と言つてもこの頃は街の真中になつて繁華になつて居ますが、昔は入谷の朝顔、入谷の鬼子母神で有名であつた所ですが、江戸の人は恐れ入りやの鬼子母神、恐れ入りやの鬼子母神、玉作りでないけれども、所を得ぬ玉作りといふので、その詞の起原を、そこで説明してあるのです。ちよつと違つて居るところにもつて来て、説明して居る譯です。同じやうな話が未だ幾つもありますが、一番名高い話をもつて來ると譯ります。仁徳天皇が弟の宇治稚郎子と位を譲り合つて居られた時に、淡路島の主の海部が、毎日々々宮中へ新しい魚を持つて來るのが、大昔から慣はしになつてゐたのが、ところが宇治へ持つて行くと浪花に持つて行け、浪花へ行くと宇治へ持つて行け、途中でその魚が腐つてしまふ。それで古事記にはかう書いてあります。「海人なれや己が物から哭に泣く」、つまり海人が己が物から、自分の物の故で泣いて居る。自分の持つて居る、自分の所有物の爲に泣いて居るといふのです。「海人なれや」、俺は海人であらうか、海人でないのに、といふそれだけ考へましても、これはこの事實に依つて出來た謡でない

ことは譯ります。つまりこの詞は、私はかう考へます。一つの説明の方法をつけなければ、關係が譯らないのですから、この説明は間違ひかも知れませぬが、考へて見ます。「海人なれや。己がものから哭に泣く」といつたのは、海人からも、即藻に引つ掛けて、俺は海人であらうか・海人でないのに自分のかつた藻、即、己が物から泣く、自分の物の故で泣いて居る。かういふ風に諺となつて、世の中に断片化して出て来て居るのです。これは、昔の物語から出て来たに違ひない、と私は思ふのです。そこへびつたりはまる、海人が魚を抱えて泣いた、といふ話があるので元は諺とか歌の方の説明は致しませぬでしたが、それが物語から脱落して世の中へ出て来、了ひには何から出て來たか譯らぬ様になつて來ます。そして、びつたり嵌らないで、ちぐはぐだけれども面白いと思はれて來ます。だから、それをなる程と合點しては、面白くないのですが、貴方がたには洒落とも何とも思へない、餘り笑はれなくなつた洒落なのです。

(三) 誣語——こじつけ物語

さういふことが次第に進んで来ますと、一つの技術として認められて来ます。これが物語の一つの違つた方面、諺語、つまりこじつけ物語として現れて居るのです。宮中にもさういふ人が居たので、持統天皇のお歌などが萬葉集に残つてゐるのです。

いなどいへど、しぶるしひのがしひがたり。このじうきかずて、われこひにけりといふ歌があります。俺は厭だ々々といふても、無理矢理に聽かせた諺語、こじつけ物語だけれども、この頃聽かないから、やはり聴きたくなつて來たといふのです。文法的の説明を致しますと、長くなりますが、それは省略致

傳承文藝に就て

冗取り

文句のやうになつて居る歌に、

いなといへど、かたれかたれとのらせこそ。しひはよをせ。しひごととのる。

私は厭だと申して居るのに、貴方には物語れくと仰つしやるから、私は申して居ます。それだのに私の云ふことを誣語と仰つしやる。それでは申しませぬ。といふことです。宮中には、語部といふものは、澤山あつたと思はれます。この語部は姫ばかりでなく、爺さんも、若い者もあつたでせうが、爺さん姫さんでなければ幅が利かない。人と違つた力をもつて居る者が、語部の團體の中から、語部の職業として、主としてやるやうになつて來た譯です。つまり物語といふものがあつて、その物語をば逆用して、人を笑はせるやうな物語が出來て來たのです。これが誣語、未だ外にも誣語の話はあります、つまり誣ひるといふことは、事實を曲げてとぢつけることです。これが恐らく、中臣の誣といふ家の姫でせう。よく譯りませぬが、もう一つには、安倍志斐姫連、といふ家があつたのでせう。その家の祖先が朝廷に柳の葉を奉つた。柳には柳のね」といつて、袋を被つたものがありますが、あの柳の葉を奉つたのです。これは木蓮に大變似て居て、常識的には、大きいか小さいかの區別しか立ちませぬ。ところがこれを辛夷の花として奉つたのです。すると傍に居る人が、これは柳の葉だ、と言つたのですが、遂々辛夷の花だと言ひ張つたといふのです。それで驚かれて、お前は安倍志斐姫連と謂へ、と仰つしやつたといふ話です。私共から見ると、餘りに横車を褒められた譯です。斯様なことは支那にもあります。秦の張孝といふ者が、鹿を馬だといつて、遂に言ひ通した。それで馬鹿といふやうになつたのだと申しますが、所謂堅白同異の辨、かういふ宮中に仕へて居る宦官見たいな者は何處の國でも、さういふ技術に達して居たらしいのです。併し茲の話だけでは譯りませぬ。何の爲に柳の葉を辛夷に

似て居ると申すのか、これだけではその證據が付いて居ない、唯家の出來た理由を、姓氏錄には要點を擱んで書いてあるだけですから、何の爲にさう云つたのか譯りませぬ。これはきつと、物語にこちつけて説明したに違ひないので成る程と形式だけは旨くまとめてしまつたのでせう。

しかし日本の大昔、諺語といふことのあつたことは考へられます。つまりこれが落し廻の前の形ですが、それが段々發達して來るのです。書き物の上ではさういふものは残りませぬ。つまり世の中に在りふれて居ることといふものは、日常のことだから書き物に書きませぬ。澤山あることならば、書き物に残つて居るだらうと思ふけれども、却て澤山あることだから書き物に書かないことになるのです。後から見ると無かつたと同じ形をとつてゐるのです。貴方が今日斯うして居られるといふことは、文部省の記錄には残るかも知れぬが、貴方々の日記の中には、當り前のことですから残らないかも知れないのです。又、貴方々が何の乗物に乗つて家へ歸つたといふことは、恐らく書かれないのでせう。綿密な人は書きませうが、多くの方々は書かないでせう。さういふ譯で、ありふれたことは書かなかつたのです。かうして、民間に於て行はれて居る事といふものは、一向記錄に残らず、その儘進んで行き、かういふ風に進んで行く途中に、謎などといふことが起つて來るのです。謎のことを話し出すと、長くなりりますから、略しませう。一方には又、歌の説明をもする様になつて來ます。この歌は、かういふ場合に出來たのだといふ風にするのですが、實は一つも辻褄の合はない説明をしてゐます。伊勢物語といふ書物は竹取物語と略々同じ時代に考へられてゐるが、伊勢物語を見ると、歌の説明をして居ます。つまり歌を中心として、かういふ場合にかういふものが出來た、といふことが書いてあるが、私共が見ると、一つとしてどの歌もかういふ場合に出來たのだといふ説明にうなづかれないので、皆喰ひ違つて居て、大抵は歌だけがぶら／＼して居ます。それなのに平氣で、昔の人は、この歌はかういふ場合

に出来たのだといふ説明をして喜んで居ます。だからさういふ技術家があつたのかも知れませぬ。物語の方とは別だから、はつきりあつたとも決りませぬが、あつたらうと思はれます。

(四) 狂 歌 な ど

これが段々後になつて來ると、すつと飛躍して、はつきりして來ます。江戸になつてからの、貴方々も御存じの、江戸でも終りに近付いてゐますが、十返舎一九の膝栗毛を見ますと、狂歌を作つては笑つて済ます所が多いでせう。つまり何かすれば狂歌で一區切りになつてます。彌次郎兵衛見たいな者が、狂歌を作るさへもをかしいが、それまゝ一つ前に行くと、一九は、膝栗毛の習作として無駄修行金草鞋といふものを書いて居ます。それ等の系統を追ふて、逆るとはつきりして來ます。そして、江戸の初め或は室町の末といふやうな時代には、さういふ種類のものが澤山あつたといふことが考へられます。江戸とそれ以前との境界のところに、さういふものが遽かに殖えて來ます。譬へば、竹齋物語、竹齋といふ藝術者が一僕を連れて旅をする、旅をして失敗しては狂歌を詠む。さうかと思ふと一方に、一休諸國廻、一休狂歌嘶といふやうなものがある。或は曾呂利狂歌嘶といふやうなものがある。一休が鶴川新左衛門を連れて諸國を歩く、或は曾呂利新左衛門が狂歌を詠むといふやうなことなど、落語の種になるやうなものが澤山あります。

それで、日本人のもつて居る落し嘶といふやうな話し方は、昔からあることが譯るのでして、断片的な智識によつて、起原をこちつけて行くといふところに出發點があるのです。それが段々進んで行くと、今度は段々滑稽の淡い味を尊ぶやうになつて來、語呂合せばかりでもつまらない、淡い洒落で何時落ちてしまつたか譯らないやうなものが出て来ます。さうなると殆ど落語が文學に近付いて來たことになります。つまり言語が藝術の形式だけでなしに、内容

か形式か譯らないやうなものになつて來ると、殆ど文學に近くなつて居る譯です。

(五) 落語の中の下わか

ところがまゝ一つ外の話があります。落語の中に下わかといふ話があります。東京では餘りさういふ話はありますぬ。下わかといふ話をしてることはいけないと暗示したから、しなかつたかも知れませぬが、放つて置けば幾らでもやつたでせう。譬へばのうてんの熊といふものが、始終出て來ませう。出て來ては隣居さんから狂歌を教へて貰つて、失敗したり、いろいろな智識を授けられて失敗する。がらづ八とかのうてんの熊のやうな者がうよ／＼して居るやうに書いてある。それが上方に行くと、喜さんといふ人間で、御隣居さんの所へ行つて失敗する。吾々は、のうてんとか喜さんとかといふものは、落語家が持えた者と思つて居るのですが、かういふやうな人間は、存外その根が深いかも知れませぬ。諸國にさういふ話が澤山あります。吾々の先輩たちがかういふやうな話をいろいろ集められたのですが、國々に依つて決つた名があります。九州へ行くと吉右衛門、吉次郎といふやうな名前であり、中國へ行くと吉五郎、四國へ行くと彦七といふやうな名前で人々を瞞す人のことを語つて居ます。了ひには天狗さんを瞞して、天狗さんの羽團扇を取つてしまふ。さうして羽の粉を身體に塗つて置いたところが、臍の所だけそれがはげてゐたので、臍だけ見えて居た。つまり狡猾な奴の話、その古いものには法螺吹きの話、嘘つき彌次郎といふ話があります。嘘つきが武者修業に行く話、嘘つき彌次郎が、此處等ではつまらないから、嘘つき村へ行つて競争してやらうといふので嘘つき村に行つて、ある家に入つたら、子供が居るので、その子供に親父はどこへ行つたかと聞くと、親父は風で飛んで行つて、月を竿竹で落しに行つた。それを聞いて驚いて戻つて來た、といふ話があります。落語といふものと餘り相違がないのです。つまり昔からの型を、喋つて居る中に、少しあは進歩して來たが、餘り相違して居ないのです。

それから大馬鹿三太郎の話、阿呆の男がお嫁さんを貰ふた。お嫁さんにいろいろ挨拶の仕方を教はつたが、覚えていたので、之れでは襪の蔭から糸を引きますから、この糸を引いたら挨拶をする、この糸を引いたら斯う、と教へられて襪の蔭に居たら、猫が間違つて糸を引っ掛けたから、三太郎が無茶苦茶するといふ話があります。或は三太郎人が喧嘩して居るのを見て分けて殴られた話。人の喧嘩を分ける時には中に入つて、両方をば引分けなければならぬと教へると、今度は牛の喧嘩を分けて、角で突かれてしまつた話。それから馬鹿の爺さんの話ですが、他所の家について園子を御馳走されたが、大變おいしい。歸りに園子々々と歩いて居る中に、田の畔をひよいと飛び越したら、ふいと忘れてしまつた。どうしても想ひ出せないで、ひよいことなどいふ名前に變つてしまつた。家に歸つてお婆さんに話したが、婆さんはそんなものは知らぬ。怒つて殴つたら瘤が出来た。それで初めて園子といふことに思ひ付いた。かういふ話は、先に申しました諺や歌を基礎にして居るので、詞の技術とは又別にあるもので、一つの塊りを爲して居るのです。つまり村同士の争ひ、村同士の確執といふものが昔からあります。昔の法度で、お互ひの部落といふものに對しては、はつきりうちわを知つて居るといふことがない。大抵想像して居るだけで、相手の村を侮辱する時、その想像に、輪を掛けて來るのである。外の村に極端な馬鹿が居ると、あの村は馬鹿村、總てが馬鹿だといふことになります。それだから馬鹿村の話が澤山あります、方々をお搜しになれば澤山あります。東京府なら東京府、或は神奈川縣なら神奈川縣に行けば、この馬鹿村といふのがあります。馬鹿村といつても、その村の人が皆馬鹿といふ譯ではないが、譬へばひじきのあらめはみちを引いて食べるといふと、ひじきのみちを引くといふのを、道を引いて食べる、と云はれたからと、その村の者は道をするぐ引つ張つて歩いて、砂まみれになつたのを食べた、といふやうな村が澤山あります。村全體をさういふ風なことは、今でも半信半疑ながらも、さういふ風にいつて居ます。それと反

對に、法螺吹きの話、自分の村の自慢、俺の所にかういふ自慢な者が居るといふことを、代表者を出して自慢した。つまり昔は智慧のあるといふことが美德です。智慧のある者が勝利で、智慧のない者が馬鹿だつたのです。現代にはいふと、智慧のある奴といふと、こすい奴、猾い奴、といふことになりますが、さういふ風のことが話に残つて居る。つまりそれは、昔の部落々々の争ひといふことから起つて居ます。それは近代の江戸になると、悪魔村同士が、年が變る時とか、節分の時に、掛け合ひをして惡態をつき合ひます。その惡態が非常に練れて來ると、惡態をつくことが職業になり、一つの藝になつて來ませう。之れと同じです。江戸等では、惡態が藝術化して、惡態にいろいろ修飾が付け加つて芝居をしてゐませう。譬へば、助六の芝居を見ましても、揚巻が利休に向つて惡態をつきませう。これらが惡態のつゝねと申しまして、いろいろな惡態をつく様になります。それが爲に、江戸の軟文學は、惡態ばかりつくやうになつたので、江戸つ子の文學といふものは、皆惡態の文學です。それが片方では、落し漸を産み出して居る譯です。

まう一つ要素があるのは、つまり、もつと下掛つた話、下掛けた話がそれに割込んで來ることです。ほとや尻や、穢いことを云ふと皆が喜びませう。これは一番原始的といふと語弊があるが、一番素樸なもので。さういふものが、中へ割込んで來た、穢い話も澤山あります。御存じの天宇受賣命が、神憑りして踊られた時の姿についての傳へがそれです。すると天照大神が天の岩屋戸の中に御隠れになつて居て、何故俺が隠れて居るのに神々が喜んで居るだらうと、開けて御覽になつたのです。或は播磨風土記を見ると、大國主命と少名彦命といふ御二人が、出雲に居られる、「お前はどうちらが辛抱出来るか」、「俺は排泄を堪へて走ることが出来る。俺は重い荷物を擔いで走ることが出来る。」それで出雲を出發して、播州の姫路の近所まで走つて行かれた。隨分走つたものですが、その中に大國主命は堪

らなくなつて、叢に屈んでしまはれたら、そこに小さな篠竹があつて、其れを彈き返して袴を穢した。はじき返したから「其處を波自賀といふ」と播磨風土記に書いてあります。ところが少名彦命も、俺も疲れたといふので、荷物を投出された。其荷物も汚れも皆岡になつた、といふことが書いてあります。昔から穢いことを云ふのが好きで、此外にもさうした穢いえろちづくなことが、幾らでもあります。つまりさういふものは、それ自身笑はせる藝術ではないのですが、それが笑はせる藝術の中へ入つて行つて、段々落し嘶が發達して行くのです。これは順序を立てゝ話すれば、面白いのですが、今回は筋道を立てゝお話する暇がないのです。

(六) 繪解きより講釋へ

吾々はどうかすると、落し嘶と講釋といふものを混同して考へますが、講釋といふものの筋道も、又別に一筋通ふて居るのです。つまり落し嘶と同じく、日本では過去の短い詞、或は短くなくとも、ある文章をば演繹し敷衍して説明する藝術といふものがあつたのです。つまり説明していくといふ點では同じことです。それから、もう一つは、何でも書いてあること、或は唱へられて居ることをば、敷衍して話すのです。講釋といふものの起りは、幾らか新しくて、私の考では、先づ繪解といふものから始まると思つて居ます。恐らく新しいと申しても、少くとも平安朝まで逆るでせうが、つまり繪の卷物の説明をするのです。初めは宗教畫の説明をしてゐたのですが、その宗教畫が次第に進んで来て、いろいろな繪物語、繪卷物といふことになつて來ます。つまり卷物をひろげて、これはどういふ譯でかう、といふことを説明して行くのですが、ところがそれがだん／＼發達して、今度は繪と同じく説明の詞葉といふものが伸びて行きます。

さうすると、繪解といふものの藝術が益々鍛へられて來、繪を説きながら文句を讀んで行き、その文句の説明の藝

術といふものが進んで來るのです。その後に段々書物になつて出た譯です。譬へば、平家物語とか、義經記といふやうな種類のものが出て來るます。さうすると又、さういふものを譯り易く説明した行く職業の人が起つて来ます。これ等は主として琵琶を弾く人たちですが、つまり琵琶を弾きながら、平家物語の文句を説明するのです。平家物語を説明するのは恐らく盲目だつたでせう。つまり盲目が琵琶を弾きながら平家物語の説明をしたのです。併し平家物語といふやうな書物になると、非常に澤山の異本があつて、同じやうなことをいろいろに書換へたものですが、それを大體、盲目が覚えて居て、覚えて居る文句に従ひながら、解説して行くのです。その解説は、文句と近く離れずに、そんなに文句から變つてしまはないのです。琵琶を弾きながら平家物語の文句を語つて行き、傍ら少しの説明を加へて行くのです。だから、平家物語そのものが、Aといふ盲目の手に依つて延長され、Bといふ盲目に依つて延長せられる中に、段々變つて行くのですが、それならば、根本の平家物語といふものはどうだといふと、盲目は讀めませぬけれども、傍について居る人が盲目に覚えさすのです。今では點字で習はせませうが、その頃は點字はなかつたのですが、かうした眼の悪い人、或は盲といふ人々の爲にすら書いた本が、平安朝の末から鎌倉の後に出來てゐるのです。

ところがもつと下つて來て、それのものでは足りないで、義經記が段々流行つて行きますと奥州の人々は、都の詞で書いたものは譯らないので、奥州に居る盲目の琵琶弾きが、奥州詞で説明し解説する様になります。解説といふとをかしいが、貴方々の中には古い講談を御聽きになつて居ない方が澤山あるでせうから、御譯りにならぬかも知れませぬが、御聽きになつて居る方は御譯りでせう。今の講釋師の方々は、聰明な方ばかりで、臺本を持たずして喋る人が多いのですが、併し臺本を持てば百人力で、どこ迄も延長して行ける譯です。だからその原文

をば奥州詞で翻譯して行くのです。今、ですから奥州詞で書いた義經記も残つて居るので。辨慶なんかも奥洲辯を使つて訛り散らして物語をするのですが、さういふ風にして段々物語を讀んでゐたのです。つまり、元は總て物語を讀んで繪解をしたのを、今度は琵琶彈の盲の坊さんが、その物語の文章を延長して解説して行くのです。

それが更に、江戸時代に近まつて來ますといふと、今度は澤山武家の浪人が出來て參ります。江戸の街、その外の大きな街で、武士が澤山祿を貰つて居ますが、それ等か、全國に落ちこぼれて、祿に在りつけない人々を雇入れて、さうした群集的に職業を失つて居る自分の目下の者を澤山連れた人達が、ある大名に加勢して、それが成功すれば其處に住み着くのですが、大名が成功しなければ落ちぶれてしまひます。すると、さういふ人達が、先づ奴になつて、自分の部下を方々に住み込ませるので。かういふ譯で、人入れ稼業といふものが出來て來ます。そして、それにくつ着いて居る浮浪の者と、暇で苦しんで居る旗本との争ひが、盛んに行はれて來たのですが、更にさういふことのやれない連中になりますと、戰場を往來した智識をば利用して、古い戰争物語を語る者が出來て來るので。大平記を讀んだり、源平盛衰記を讀んだり、つまり大平記讀、盛衰記讀といふ職業が出來て來たのです。これは真ツ正面に大平記、源平盛衰記を、その儘讀むのではなくて、講釋をするのです。つまり普通の人が聽いても譯るやうに、非常に肝腎なところはその儘讀むけれども、入り組んで譯らない事情等は、皆説明して行くのです。着て居る衣裳の説明をするとか、或はその人々の關係を説明するとかといふやうな、意味文句を説明する、これが段々發達して、つまり講師といふものが出で來たのです。

だから、それらの講釋師は、初めは自分達が戰場を往來したから、戰さに關する駆引きは知つて居ますので、その智識を振廻して説明した譯です。これが二代三代と重つて來れば、その浪人氣質がなくなつて、普通の町人になつて

來ます。それで段々講釋といふものも、意味が變つて來る譯です。それでも尙、極く近年までは、講談では軍書を讀むといふことが一番本格なものとされて居たが、譬へば近年死んだ馬琴その他の先輩が亡つてからは、軍談を讀む人なくなつて行く様に見えます。この會の講師の方々、どの方を見ても、軍談には凡そ興味を失つて行つて居られる様な氣がします。併し未だに軍談といふものが、講釋師の一番本格的なものと認められて居まして、職人が博奕打か譯らないやうな二尺もの、博奕打、泥棒といふやうな社會のものは、一番講釋の下司なものとされては居ますが、それだけに又情に近く、今の吾々生活に近く掘り下げられても來た譯です。

非常に要領を得ない話になりましたけれども、ともかくも日本の傳承文藝の、二つの型の話は、これで出來たと思ひます。つまり世の中を持つて流浪して歩く文藝があつたといふこと、それからもう一つその外に、斷片的に世の中に行はれた權威ある詞を説明して行く、といふ藝術が、段々世を経るに従つていろいろに變つて來て、先づ落し嘶があつものが生れて來る。それと同じ脈とは必ずしも云へないけれども、物語を説明するといふやうな形で、繪解きから講釋といふものが生れて來る。かういふお話を申上げたのです。

ところが最後に申して置きたいことは、この二つの傳承の形といふものは、實は別々のものではなく、丁度講釋の時に申しました繪解のことを、もう少し申上げれば譯りますが、つまり吾々は、文字とそれから口で言ふ詞とに、かつきりした區割を考へ過ぎて居ますが、能く考へますと、これは文字で表したものは口へのり、口で表したものは文字へ出で来るといふ、相互關係を始終繰返して居た譯です。だからして、平安朝から起つたらうと思はれる繪解といふやうなものでも、直に口の上のものになつて來たのです。譬へば地獄極樂變相圖といふやうな繪を書いて、それを示しながら悪い事をすると、かういふ風になるぞ、といふ因果律の物語をする、さうした爲事が、段々世の中を流浪

して歩く人達の仕事になつて來たのも、これは繪解きがあつて始まつたのではないのですが、熊野の社をば増築する爲に、といふ美名の下に認可せられたのです。これが一時非常に澤山になりました。熊野に觀世音比丘尼といふものがあります。その熊野の觀世音比丘尼といふのが、女の居る家へ出掛け行つて、地獄變相圖を掛けて哀れな説明をする。つまり、女といふものは罪の深いものだ、殊に女でありながら女にならずに終るといふことは、洵に不幸なものである。それであるから貴女が熊野にお頼みするといふならば、私が頼まれて行かう。といふことでお金をお金を貰つて行つたのです。日本では古くから結婚しない者と子供を産まない者は、これは同じことで、兩者とも死後血の池地獄へ落ちると信じられてゐたのです。だから、それが厭ならば、私に頼みなさいと言つて歩いた譯です。獨身の暮しをする者の多い江戸等では、かういふ者の力が伸びて行くのは當然な譯です。何の爲か譯りませんが昔は石女が多かつたのであります。それで觀世音比丘尼などいふものが跳梁跋扈したのでせう。さういふものが繪解きをし、歌念佛といふものを唱へます。

(五) 江戸時代の傳承文藝

つまり江戸の文學といふけれども、江戸の傳承文藝として淨瑠璃、說經、祭文、念佛、この四つが非常に大事なものです。その中の念佛といふのは、種類がいろいろありますけれども、比丘尼歌念佛と申しまして、この歌念佛の文句をば小説にし、或は淨瑠璃の翻譯したものが、可なりあります。これは、立派に口承文藝、傳承文藝の、本當に文學に入つて行つたものです。譬へば、お夏清十郎の物語といふものは、西鶴も作つて居ますし、近松も作つて居ます。その後も屢々蒸し返され、今でも蒸し返されて居ますが、これは熊野の觀世音比丘尼が物語つた物語に違ひないのです。眞實の事實だといふので、五十年忌の歌念佛といふやうなものを書いてゐますが、清十郎が獄門に掛つたのは何時だ

といふやうなことを云つて歩いて、清十郎歌念佛といふやうな清十郎を紀念する意味の題目を唱へたのだと思ひます。

さういふ風に昔の形が繰返しして出来来る、この形といふものは、日本の國が出来て居つたか、未だ出来て居なかつたか譯らない時代、出来て居るといふのはをかしいのですが、國の基礎が本當に定つて居たか、定つて居なかつたか、譯らぬ前からの形です。そしてその形を何時でも繰返して居るのでです。今でも祭文といふものがありますが、恐らくあの祭文といふものが、今の浪花節の基礎になつて居るでせう。祭文といふ語自身に、變な聯想がくつ附いて居まして、祭文のことを日本左衛門と謂ひます。日本左衛門といふのは、沼津の利兵衛といふ大泥棒といふことになつて居ます。當時の祭文語りといふものは、あちらこちら流浪するから、それで日本左衛門と稱する祭文節があるので、——山伏といふのは修驗道の極く末輩の者達が、錫杖を鳴らしながら人の家の門に立つて物乞ひをする。——それが不眞面目な者ならば、人の家の息子や娘のこと等を唱へる譯です。かうした所から、新版歌祭文といふやうな淨瑠璃も出來、それから更にお染久松といふやうな小説にもなつて來た譯です。それから説經といふものは非常に古いものです。

説經の本を質すと、平安朝の末までは遡れると思ひます。未だ確かに考へて居ませぬが、略々説經といふのはお經の意味を敷衍して、それに適切な物語を嵌めて行く、つまり、過去現在未來に亘つて、適切な實例をば、お經の文衍す。だから平安朝あたりの説經師といふものは、非常に辯舌を練つたものらしいのです。ところがそれが次第々々に藝能化して行つた譯です。

それから淨瑠璃といふものは、説經の女の語りものを言つたのです。つまり、説經で女の語るものが淨瑠璃だつたらしいのでして、つまり女語りが面白いから、説教よりも淨瑠璃が段々盛んになつて來たのです。唯、室町をまう少し下つて、織田・豊臣といふ時代になつて、その時代に出て來た淨瑠璃十二段草紙といふもの、これは牛若丸の愛人淨瑠璃姫のことを作つた物語ですが、これは義經記の裏を言つたやうな物で。この淨瑠璃姫のことを書いた物が非常に盛んであつたので、それから淨瑠璃が始つた、と申しますけれども、私はさうは思ひませぬ。もつと前から淨瑠璃といふものがあつて、女が薬師如來の功德を說いたもので、さういふ物語が淨瑠璃で、それが段々進んで來た時に牛若丸のことを綴つて、その愛人をば淨瑠璃姫としたのだと考へます。で淨瑠璃姫は、三州の三河の寶來山の峰の薬師様の中子だ、といふ風に傳へられて居ますが、それが段々進んで來て、結局姫の名前を淨瑠璃姫と命名する様になり、その物語が非常に盛んに行はれたので、淨瑠璃といふ名前が固定してしまつたのだ。と斯う私には思ひます。それでこの説經と淨瑠璃とが、並びながら江戸へ入つて來た。だから民間の語り物の柱は、どうしても説經と淨瑠璃それのまゝ一段低いのが祭文・念佛、といふやうな種類のものになるのです。そしてそれらのものが、昔の物語をば傳へて居る譯です。

ところが吾々はかういふ風にも考へます。即それらのものの傳えて居るのは、極く近代のものだらうと思ふけれども、存外昔に種があつて、それが時代々々に順應するやうに、主人公の名前を變へ、事件をば潤色したりして、變化して來て、元の形を失つてしまつて來て居るのだ、とかうも言はれると思ひます。だから結局、江戸時代の四つの語り物を摑めて考へましても、その根本へ廻りますと、話の種類が非常に簡単になるのではないか、と思ひます。この度の話は、大變纏りのない話でしたが、唯或はかういふ風な考へ方を爲されなかつた方も澤山あるかと思ひまして、

必要な方面、及び多少でも興味と暗示とを與へ申すことが出来れば宜いと考へて、纏らないのを覺悟で申上げました。傳承文藝としては、この外に未だいろいろなものがあります。けれども、この度の催しに對しての傳承文藝といふものは、先づそれ位で話は盡さるかと思ひます。

昭和十年七月二十日印
昭和十年七月二十五日發行

編者

文部省社會教育局

發行者

永田與三郎

東京市牛込區赤城下町六十六番地

印刷者

永耕作

發行所

東京
大阪

東洋圖書株式合資會社

東京店 東京市神田區神保町一丁目六十七番地

振替東京一〇三七番・電話神田(25)三七四五番

大阪店 大阪市南區內安堂寺町一丁目二十八番地

振替大阪三九五五六番・電話東(94)二八六八番

法讀朗と法話

付 奥

【錢拾八圓貳金價定】

大賣捌所

有所權著作

